意味の理解は説明可能か？

―ダメットの意味理論にもとづいたウィトゲンシュタインの規則遵守問題の批判を通じて―

教育内容開発コース　　佐　藤　祐　一

Is Understanding of Meaning Explicable?
: Through a Critique of Wittgenstein's Rule-Following Problem Based on Dummett's Theory of Meaning

Yuichi SATO

The whole discussion presents a critique of Wittgenstein's rule-following problem based on Dummett's theory of meaning in educational relevance. Despite the admission that meaning is use and the emphasis of ostensive training in language acquisition, Wittgenstein and Dummett elaborated decisively irreconcilable arguments over explicability of meaning. Repudiation of Frege's realism and obliteration of systematic accounts of verbal practices in Wittgenstein identify themselves with the exegesis that a blind correspondence of an act is the only criterion for rule-following. Contrastingly Dummett, contending that this assumption embodies constant danger of incommunicability, formalises, on grounds of Frege's distinction among sense, reference, and force, a theory of meaning which reasonably clarifies our knowledge in understanding a sentence. It is conjectured that Dummett's proclamation that a theory of sense, the mode of representation of understanding, can not only be shown but also be stated infers that a harmonious transformation between these two states arises in the process of conservative expansion; namely a sense firstly presented in an ostensive manner becomes constitutive of effectively decidable statements instrumental both in systematic refinement of our learning and in a grasp of another newly shown. Nonetheless, the question of how this transformation practically manifests itself, largely depending on subject matters, still remains unsolved, which has to be meticulously scrutinised in diverse curriculum studies. A concluding remark also notifies that "philosophy of thought" proposed by Dummett, which should elucidate in what a grasp of meaning expressed by language consists, must be established as a philosophical basis of education.

目　　次

1．ウィトゲンシュタインとダメット
2．ウィトゲンシュタインの使用説
3．ダメットの意味理論とその教育学的関連性
4．思想の哲学―教科教育学の哲学的基礎―

1．ウィトゲンシュタインとダメット

人が対象を示しながら語を発することによって，子どもはいろいろな語を理解するようになる。つまり，子どもはまさに直示的説明（hinweisende Erklärungen）を受けるのであり，そうやってそれらの語を理解するに至っている―しかしその際，理解したということの基準は何か。それは，その子どもが語を正しく使用しているということだ。子どもは諸規則を推測しうるのか―だが翻って思うに，対象を示し語を発するということが，そもそも「説明」と呼ばれてよいのだろうか。というのも，この言語ゲームはまだきわめて単純なものでしかなく，そこで直示的説明が演ずる役割は，発達した言語ゲームにおけるのとは違っている。…（中略）…。幼い子どもについて，「彼はその言葉を使うことができる。その言葉がどう使われるかを知っている」と言ってもよかろう。しかしそれがどういうことなのかは，この知っているということの基準は何かを問うて初めて分かる。この際それは，規則を提示する能力のことではない。（Wittgenstein, L. *Philosophische Grammatik: Teil 1*, §26）

ある数学理論の言語を学ぶとき，我々は，その言語の言明を使うことを学ぶのである。それらの言明が計算によっていつ確立されたと言えるのか，しかるべき計算をいかにして成し遂げるのか，を学ぶ。それらの言明が何から推論でき，何がそれらの言明から推論し得るか，つまり，それらの言明が数学的証明において

いかなる役割を果たすか，また数学外の脈絡にどのように適用できるか，を学ぶ。そしておそらくまた，もっともらしいいかなる議論によってそれらの言明が確からしくなるか，をも学ぶのである。これらのことが，当の数学理論の言語における表現の意味を学ぶとき，我々に示されることのすべてである。…（中略）…。我々がその言語の言明や表現を正しく使うことに習熟すること，そのことが，それらの意味を我々が把握したかどうかを判断するために，他の人たちが期待し得ることのすべてである。したがって，その言語の言明の意味やそれらの言明に含まれる記号や表現の意味の把握は，それらの言明を正しく使うという能力のみに存し得るのである。（Dummett, M. “The Philosophical Basis of Intuitionistic Logic” in *Truth and Other Enigmas*, p.217）

ウィトゲンシュタイン（Wittgenstein, L. 1889-1951）とダメット（Dummett, M. 1925-）の教育観には共通の土台が存在する。すなわち，それは一つには，意味と使用との等置（以下「使用説」と記す）であり，二つ目には，言語習得が，他の言語的表現による説明を介さない「直示的説明」―すなわち，語の指示対象を述べる（sagen）のではなく，あくまで示す（zeigen）こと―における訓練を通じて，適切な使用法を子どもが模倣することから開始されるということである[1]。だが，この両者は，言語の意味理解についてまったく真逆の哲学を展開してゆく。すなわち，ウィトゲンシュタインは，我々はあくまで盲目的な一致（Übereinstimmung）によって規則を遵守すると見なし，その言語的な正当化可能性を棄却する一方で，ダメットは，言語による明示的表現こそ規則理解の本質であり，またその体系的理解が我々の知識を洗練してゆくと説く。ダメットの意味理論（a theory of meaning）構築への熱意は，ひとえに，我々の言語的理解が何に存するのかを，実効的な演繹によって言語的に構成すべきだという動機に支えられる[2]。この両者の違いは極めて興味深いテーマだが，哲学でも教育学でも十分には議論されていない。すなわち，使用説と直示による訓練の重要性をともに認めながら，なぜ一方で，ダメットが「徹底した規約主義者」[3]（the full-blooded conventionalism）と評した体系的説明の放棄という地点にウィトゲンシュタインが至り，他方で，言語による理解の体系的解明を目指すという，理解の理論（a theory of understanding）としての意味理論の実現へとダメットが歩んだのか，ということである。

本稿は，ウィトゲンシュタインにおける使用説をダメットの意味理論によって批判することで，教育学的文脈との関連において意味理解の問題に新たな視座を提供することを試みるが，しかし，単なるウィトゲンシュタインとダメットの比較だけで議論は成立しない。ウィトゲンシュタインとダメットの哲学的連関のより深遠な診断において，ウィトゲンシュタインが絶大な影響を受けながらも，その反駁に努めてきた実在論[4]の代表者であり，なおかつ，ダメットが使用説を引き継ぎながらも，それを乗り越えようと理解の説明可能性を論証する際に依拠した―ダメットが「分析哲学の祖父」と呼ぶ―人物の存在が大きく立ちはだかる。すなわち，フレーゲ（Frege, G. 1848-1925）である。ウィトゲンシュタインもダメットも，フレーゲの影を甚大に引きずっている。そもそも，私の理解が間違いでなければ，両者の哲学は，フレーゲ的プラトニズムから生ずる認識論的アポリア―すなわち，言語的意味を認識超越的な理念的存在物として措定するならば，いかにして我々が意味の把握に成功するのかという難題―をどう克服するか，という点で共通に格闘したように思える。フレーゲの心理主義批判を使用説確立のために踏襲したウィトゲンシュタインは，後期[5]において，その難題の解決のために，技術の習熟を言語ゲームの根源に据えることにより，言語的に正当化しえない行為の盲目的一致こそ，「生活形式」（Lebensform）としての言語の一致である[6]という反基礎付け主義的哲学を展開した。他方でダメットの反実在論は，直観主義数学の論理を援用して，フレーゲ的実在論を構成主義的に読み直すことによって，独自の基礎付け主義的な意味理論の構築を目指した[7]。この両者の解決策の違いは，意味理解についての根本的な思想的相違である限りにおいて，教育学的にも極めて重大な概念的提起である。

第二節では，後期ウィトゲンシュタインにおける意味の使用説について検討する。使用説の萌芽は，前期の『論理哲学論考』（*Tractatus Logico-Philosophicus*, 以下『論考』）3.328節「使用されない記号は意味を持たない」にすでに現れている。使用説が盲目的な行為の一致と結び付くためには，規則遵守を言語的理解から切り離すウィトゲンシュタイン独自の思想が入り込むが，それを明るみにすべくクワイン（Quine, W. V. O. 1908-2000）の全体論との対比を一つの参照点とする。第三節では，フレーゲに由来する意義（Sinn）と指示（Bedeutung）との区別が[8]，ダメットの意味理論の形成において極めて中核的な役割を果たすことを論

ずる。フレーゲとダメットの決定的相違は，フレーゲが文の意義を経験独立的な普遍性としての「思想」[9]（Gedanke）に属するとする一方で，ダメットはそれを，我々が文を理解するときのその理解の仕方としての表出と捉え直すことである。これが，意味の伝達不能性を含意するウィトゲンシュタインの言語観と袂を分かつ意味理論構想の端緒であり，ダメットの反実在論的意味理論は，大まかに述べれば，フレーゲの言語哲学とウィトゲンシュタインの使用説，そして数学基礎論における直観主義論理の自然言語への応用によって構成されている（三番目の要素については本議論では取り上げない）。またダメットは，意義が示されるだけでなく語られるものだと述べるが，その明確な論証は提起していない。本稿では，その議論にダメットが別の個所で論ずる「保存的拡張」[10]（conservative expansion）の概念が結び付き，なおかつそれが言語による理解の体系的洗練化において基礎的な形式であるという解釈の提案を試みる。最後に，言語の意味理解が何に存するのかの明示的な解明の役割を負う，ダメットが「思想の哲学」[11]（philosophy of thought）と呼ぶ領域が，教育学の哲学的基盤として構築されるべきであることを説く。

2．ウィトゲンシュタインの使用説

「言語の働き方を心理物理的メカニズムとして説明することには，我々は関心をもたない」[12]，「文法における一つの語の場所が，その語の意味である」[13]という洞察は，端的にフレーゲ由来の心理主義批判と文脈原理の擁護である。それらは，『算術の基礎』（*Die Grundlagen der Arithmetik*）においてフレーゲが唱導した三つの原理のうちの二つ，「心理的なものを論理的なものから，主観的なものを客観的なものから，明確に分離しなければならない」，および，「語の意味は，命題という脈絡において問われなければならず，語を孤立させて問うてはならない」[14]という宣言の，ほぼ純粋なる引継ぎである。フレーゲはこの二つの原則によって，語の意味を主観的心象から引き離し，文の意味を観念の複合とみなす古典的経験論を棄却した。語は，フレーゲにとって，それが内在されている文が真であることに寄与する構成的要素である。合成原理による，文の真理決定に対する語の寄与という着想は，概念と対象―それぞれ，不飽和な述語とそれに帰属可能な単称名辞によって表現されるところのもの―を認識独立的な普遍的存在物と措定する限りにおいて，真理が本質的に我々の使用を超えて普遍的に確定されていると説く[15]。「思想は，それが真であるとき，我々の承認から独立に真だということのみならず，我々の思考作用からそもそも独立なのだ」[16]というフレーゲの断固たる実在論的真理観の一方で，ウィトゲンシュタインにしてみれば，使われずとも存在している命題は，死に体で興味を引くものではない。『論考』において芽生えた使用説は，「記号の生命であるものを名指せと言われれば，それは使用である」[17]と述べるように，中期以降より鮮明になる。

語の意味が言語使用との関連によって決定されるとする立場は，規約主義的な一面を見せる。規約主義と言えば，論理実証主義の検証主義的言語観が思い起こされる。実際に中期のウィトゲンシュタインは，命題の意味を検証条件と等置する彼らの立場に与するが[18]，それによれば，命題の有意味性は，検証可能性と規約による真の二つに還元される。すなわち，感覚与件命題として得られた観察文を要素命題として取り扱い，定理などの個々の事実的命題は要素命題の複合として，真理関数による構成によって検証可能であるとき，その一連の検証を命題の意味と見なすのである。だが，数学的，科学的推論における証明や検証の際に用いられる推論規則が，我々の使用する言語的規約の登録によって必然的に真だと保証されると想定する限りにおいて，検証主義はかの有名な無限後退のパラドックスを生み出す[19]。ウィトゲンシュタインの思想の関心は，そのパラドックスにいかなる影響を受けたかは定かではないにせよ，検証主義が露呈した規則遵守の成立要件がいったい何に存するかという難題への挑戦に，次第に矛先を向けることとなる。検証説と袂を分かつ第一歩は，独特な数学観に現出する。

> 推論規則が記号にその意味を与えるのだ。なぜなら，推論規則とはこれらの記号の使用規則だから。推論規則は記号の意味の規定に属している。この意味で，推論規則が正しかったり間違ったりすることはありえない。[20]

との表明は，論理的推論という言語ゲームにおいて，使用する語に好きなように意味付けができるという自由性を前面に押し出す。この，「数学者は発明家であり，発見家ではない」[21]という宣言にも表れるような徹底した構成主義は，定理の証明が新たな推論の規準の採用であり，そして，我々の側に自由に委ねられている定理の採用決定が，推論という言語ゲームにおける

意味の変化を引き起こすことを積極的に認める[22]。それに対して，証明の承認を，推論全体における意味の変化と同義だとする立場に対しては，以下のような反論を対置できる[23]。すなわち，新規則の導入が，以前には推論しえなかった新たな定理の導出を実現するならば，確かに意味の変化はそれに随伴するにせよ，そうでなければ，証明は，あらかじめ承認された推論規則にもとづいて遂行される我々の言語実践の中ですでに用意されている限りにおいて，意味の変化をもたらさないのではないか，と。

この反論は，ウィトゲンシュタインの使用説とクワイン（Quine, W. V. O. 1908-2000）の全体論（holism）との思想的類似点と相違を炙り出す。すなわち，クワインによれば，我々の言語的知識は，周辺部における観察言明が常に直接的観察報告の経験との接触に晒されている人工的構築物であり，不都合な経験への対応によって，その体系の中核に位置する論理的，科学的命題までもが常に訂正可能性を含んでいるような総体である。個別の言明が，それに対応する特定の経験的事実や推論規則を指し示すのではなく，言明間での論理的な再評価を伴いながら，「全体としての場に影響を与える均衡の考慮を通じて，間接的な仕方でのみ」[24]特定の経験が特定の言明と結び付くという全体論的着想は，いかなる言明も平等に改訂を免れえない点で，総合的命題と分析的命題との区分の棄却，および検証説における還元主義の否定を包含する。我々の知識総体に反する経験が生じた際に，観察文も論理法則も含めて改訂には幅広い選択があるというクワインの主張は，確かに，定理の採用が推論の言語ゲームにおいて意味の変化をもたらすとするウィトゲンシュタインの構成主義的数学観に通じなくもない。実際に両者は，言語実践の経験的進行に応じて，推論規則全体の変更可能性の自由はいくらでも保証されるという立場に与しているように思われる。『確実性について』（*Über Gewissheit*）においては，丹治（1996）が指摘するように，全体論的言語観に酷似する発言がいくつか見受けられる。

> 我々は，規則を学習することによって経験的判断を下す実践を学習するのではない。我々には，諸判断と，他の判断との関連が教えられるのである。判断の全体性が，我々にとって妥当なものになるのである。[25]

> 我々の知識は，一つの巨大な体系を形成する。そして，その体系内において，個々のものが，我々がそれに添付する価値を持つのである。[26]

しかし，全体論者ならば，数学的証明の可能性は，我々が容認する一連の推論規則の全体的実践の中ですでに潜んでいるため，定理の承認によってその都度意味の変化が生起するという構想は描写しえないだろう。それは，現にクワインの，「過去の経験を参照した未来の経験を予測する道具」[27]としての科学的言語観にも反映される。全体論は，経験との照合による改訂可能性を維持しつつも，言語が論理的推論に適合する仕方で体系的に組織化されるという見方を手放さない。だが，ウィトゲンシュタインは，まさにその立場と相容れないように見えるのである。

> あなたは，言語ゲームがいわば，予測不能なもの（Unvorhersehbares）であるということを念頭に入れなければならない。つまり，私が意味しているのは，それは論拠に基礎付けられるものではないということである。それは理性的ではない（あるいは非理性的でもない）。それはそこにある。― 我々の生活のように。[28]

数学的定理を推論規準として採用するかどうかは自由であるというウィトゲンシュタインの構成主義は，論理的強制力をもって我々に定理を受容することを強いるという意味での客観的必然性からの脱却である。この言説は，『哲学的文法』（*Philosophische Grammatik*）における，数学基礎論においてメタ数学による公理論的基礎付けという深刻な課題を背負わされたテーマ，すなわち無矛盾性（Widerspruchsfreiheit）証明に対する，ウィトゲンシュタインの冷淡な反応―規則は基礎付けられえず，ただ行為の記述の文法が諸規則と一致するかどうかによって診断されるに過ぎないとする反基礎付け主義的見解―にも見られるように，言語の論理的体系化からの離反を明白にする[29]。体系的な説明可能性の棄却は，数学のみならず言語一般における規則遵守を問題の射程に入れるとき，語の使用が理解なしに，すなわち，なぜその語を使用しなければならないのかの正当化の把握なしに，なされるという立場を導く。

> 我々が「理解」と呼ぶのは，我々に理解していること（Verständnis）を示すような行動―どのような行動であれ―ではなく，行動がそれに対して一つの兆候であるような状態である。[30]

という規定は，理解が規則遵守の行動を取る際の本質的な構成要素ではなく，単にその一つの兆候に過ぎないことを示す。この，規則と理解との乖離は，『哲学探求』（*Philosophische Untersuchungen*, 以下『探求』）においてより徹底される。201節の有名なパラドックスは，いかなる行為も規則に一致させることも矛盾させることもでき，一致，不一致といった概念が無意味なものになる限りにおいて，規則は行為の規範性を保持しないという帰結を導くものだった。そしてそれは，解釈が規則遵守を支えるのではないということの明確な示唆である。199節の文言「ある文を理解することはある言語を理解することである。ある言語を理解することは，技術に習熟することである」[31]は，全体論に近い表明を行いながらも，言語習得の原初的土台があくまで，技術としての行為の一致に求められることを明確に主張する。行為の正しさの規準を「共通の人間的な行動様式」[32]（die gemeinsame menschliche Handlungsweise）に求め，言語による一致をあくまで生活形式における一致と見なすことは，ダメットの言葉を借りれば，それらが一切の説明を必要としない「むき出しの事実」[33]（a brute fact）における，その都度の一致と見なすことである。そして，いかなる言表可能な論拠をも正当化条件として用意しないという立場は，最終的に，行為の盲目的一致という描像を浮き彫りにしてゆく[34]。

数列の学習場面において，2, 4, 6, 8, 10,…と数列を書き続けた子どもが1000を超える1004, 1008, 1012,…と続け，教師が誤りを指摘しても子どもは正しい規則に則って数列を書き続けていたと反論する『探求』185節の事例について，有限個の事例からは複数の解釈可能性が存在するがゆえに規則の明示化は不可能であり，行為の一致の確認によって学習がなされたとするしかないとする永井（1991）や丸山（2000）の立論に対しては，解釈の複数性が根本的問題なのではないという反論を対置できる[35]。解釈の複数性というだけでは，教師の意図した数列が $a_n = 2n$，子どもの意図した数列が n ≦500のとき，$a_n = 2n$，n ＞500のとき $a_n = 4n - 1000$という一般項で表現されるというような規則の明示化可能性を排除しない―すなわち盲目的一致という帰結と直接的に関係しない―と同時に，丸山（2000）が認めるように，その相違が個人の経験や共同体的慣習にもとづく多様性であるとするならば，それはむしろ，クワインの全体論における根元的翻訳の不確定性（indeterminacy）と親和的な立論なのである[36]。同様に，クリプキ（Kripke, S.；1982）のクワス（quus）という発想も，クワスが数学的に構成可能な仕方で明示的に定義される時点で，体系的な説明可能性を全面放棄するウィトゲンシュタインの解釈としては根本的に齟齬がある。真理条件の対案としての言明可能性条件―これは次節で「主張可能性条件」として再登場する―をウィトゲンシュタインに帰属させる診断[37]は，そもそもそういう条件なるものを真っ向から否定しているという事実を鑑みれば，完全に的外れなのである。むしろ，規則遵守においていかなる正当化言明も用意しえないというウィトゲンシュタインの徹底した反基礎付け主義に倣うのならば，米村（1996）の「生の事実」[38]という表現が示すように，技術のうえでの他者との暗黙的一致の確認なしには，我々はせいぜい「そうするからそうするのだ」という仕方でしか規則を学びえないだろう。しかし，それは同時に，学習における知的思考の無力化や，意味の全面的な伝達不能性という，我々の言語実践的直観とはまったく相反するような帰結をも招き入れることになるのである。

3．ダメットの意味理論とその教育学的関連性

所与の使用のあり方を顧慮せずに，端的に規則の遵守を判定できるとするウィトゲンシュタインの言語ゲーム論が「伝達がすっかり機能停止に陥る危険に，絶えず晒されている」[39]というダメットの危惧は，使用説を認めながらも，理解を不可侵なものとして扱わずに明示化させる哲学を展開する。伝達可能性に息を吹き返させる論点の一つは，「表出論証」[40]（manifestation argument）である。言明の意味を知っているというとき，その知られたものが何であるかが判明に説明可能でない限り，我々はその知識を誰かに帰属させることはできない。「誰であれ，もしかれの伝達が観察され得ないものならば，かれは伝達できないのである」[41]という論旨は，レシュカ・ハーディ（Röska-Hardy, L.；1992）の言葉を借りれば，「言語使用において観察可能なもの」[42]（das im Sprachgebrach Beobachtbare）への参照こそが，意味理解の記述の出発点であることを示す。意味を記述不能で不可侵なものとして取り扱わない限り，ある知識を持つ人とそうでない人との，振る舞いや使用における表出される観察可能な違いこそが，意味理解の構成要素となるのである。もう一つの論点である「習得論証」（acquisition argument）は，子どもの言語習得が，使用として表出されるものの実践的振る舞い―例えば，ある言明が推論においてどう機能するか，数学的証明の様々な脈絡へどのように適用

可能かなど―を学ぶことに尽きる，ということを意味する。適正な使用の習熟や，他者の使用が適正であるかどうかを把握する判断能力の醸成は，観察可能な形で表出された使用法を模倣し，学習することに端を発する。だが，意味の学習可能性という仮定は，意味がすべての人にとってアクセス可能な公共的一般性を備えているという限りでの客観的な伝達可能性を前提とするのである。

もっとも，ある文の意味が別の言語的表現による言い換えで常に説明可能であるとの仮定は，論理実証主義が陥ったような無限後退と同じ道を辿る。基底的部分における暗黙的知識[43]（implicit knowledge）による意味の習得という観念は，ウィトゲンシュタインと同様に，根源的把握が直示による訓練や模倣によって開始することを支持する。だが重要なことは，基底的な部分において暗黙的知識による把握があるにせよ，すべての意味理解がそれにもとづくわけではない，ということである。むしろダメットの意図は，暗黙的なものをいかに明示的に引き出すかという表出の体系的記述への期待であり，それを理解の条件として説明する意味理論構築の企てという点にある。さて，

> 我々はもはや，言明の意味を，その言明の真理値をそれの構成部分の真理値にもとづいて規約し，それによって説明するのではなく，その言明がいう主張できるか，をそれの構成部分が主張し得る条件にもとづいて規約することによって，説明するのである。[44]

という主張可能性条件の重要性は，まず一つには，フレーゲの実在論的真理観の棄却という点にある。フレーゲの実在論を支える二値原理は，言明が認識過程や検証方法から独立して常に真か偽のいずれかであるという見方を手放さない。だが，検証不可能であるにもかかわらず真偽を決定可能と見なすことは，その決定手段が結局は伝達不可能なものであるという帰結を免れない。使用説を堅持するならば，むしろ実効的に構成可能な検証こそ意味の中心概念に据えられるべきであり，二値原理的な真理概念は中心からの退却を余儀なくされる。また別の重要性は，ウィトゲンシュタインにおける言語と生活形式との直接的結び付きとは対照的に，ある言明の真偽の決定が他の言明の真偽との複雑な体系的ネットワーク―例として数学的命題の証明を想起されたい―によって成立しているという言語像にある。暗黙的知識の容認は，規則への常なる盲目的一致を導くわけではない。我々の意味理解と真偽判断の実態は，「ひとたび我々が言語学習のある段階へと到達すれば，残りの言語体系の大部分は純粋に言語的表現という手段によって我々に導入される」[45]という文言に見られるように，諸々の言明の論理的相互関係の把握を必然的に伴う。だが，その論理的相互関係を支える推論規則は，フレーゲにおける分析的に真なる論理法則ではなく，直観主義論理に根差した「実効的に決定可能」（effectively decidable）な論理を基礎に敷くのである。

フレーゲにもとづく意義（Sinn）と力（Kraft）の区別は，修正が施されて意義の理論（theory of sense），力の理論（theory of force）としてダメットの意味理論の中心的位置に存立する。力の理論から先に論ずれば，フレーゲが，

> 主張文においては，そこで表現されている思想（der ausgedrückte Gedanke）と，その思想が真であるという主張（die Behauptung seiner Wahrheit）の二つがきわめて緊密なかたちで互いに結び付いているのが普通である。両者がしばしば明確に区別されない理由はそこにある。しかしまた，ある思想が真であると言明することなく，その思想を表現することができる。[46]

と述べるとき，思想の把握，判断，主張はまったく別物として切り離され，例えば科学的探究においては，「酸素ガスは液化する」という思想の把握をなした後に，「酸素ガスは液化する（ことは真である）」という主張を別途行いうることを示唆する。ダメットは正当にも，フレーゲの力の概念がオースティン的な言語行為論の先取りであると評価し，論理的な正当化の文脈における真偽の主張のみならず，質問すること，命令すること，賭け事をすることなど，何らかの目的を伴った一連の言語的行為を力の理論が説明できるとする点で，語用論的意義をそれに帰属させる。そして決定的な重要性は，真理概念が引き出される源泉が，まさに主張という発話の力に求められるとする点にある。あることが真か偽であると主張することは，ある種の客観的な正しさの基準（objective standards of correctness）によって個々の主張が判断されるところの言語ゲームにおいて，その事柄の正誤が適正に検証されそして把握されるという言語活動が十全に機能していることの証左である。真理は意味理論の中核的概念から退却せざるを得ないとはいえ，まったく無用なものになるわけではない。それは，認識超越性に帰属されずに，正誤の主張という言語実践の活動様式から

本質的に派生するのである。「教師はそれ（教育内容における理念的意味）を正しく教え，子どもはそれを正しく理解する，と考える限り，パラドックスが生じる」[47]という米村（1996）の主張が，真理概念の不要さをも含意するとき，それは思想内容と発話の力との区別を見逃していることになる。たとえ教育的文脈の中においてであっても，主張という言語行為が本質的に真偽の陳述を志向して遂行されるという厳然たる事実を，我々は常に考慮に入れるべきなのである。

フレーゲが提起した意義と指示との区別は，ダメットの意味理論においても生命線である。その区別の源泉は，言明の同一性概念の分析にある。フレーゲによれば，a＝aという言明とa＝bという言明では明らかに認識価値（Erkenntniswert）が異なる。前者は，アプリオリな必然的真理と見なせる分析的命題である―この解釈がどこまで妥当かは別の議論になるが―のに対して，後者は明らかに認識拡張的な情報を含んでいる。「宵の明星」と「明けの明星」が，言語的表現の違いのみならず，日常的，文化的な意味付けの違いがあっただろうにもかかわらず，同一の惑星を指し示すという天文学的事実は，人類の歴史の中で驚くべき発見であったに違いない。こうした考察から，記号によって表示されたものとしての指示―金星という惑星―と，「表示されたものの与えられる様態」[48]（die Art des Gegebenseins des Bezeichnen）としての意義―金星を「宵の明星」や「明けの明星」と表現するその仕方―という区別が産出される。二つの異なる表現による同一対象の指示は，その指示を決定する仕方の違いを反映する。そして，フレーゲ的実在論は，意義と指示との結び付きが，認識手段から独立に与えられていることを説く。ダメットが反駁するのは，まさにその実在論的前提である。ダメットにとって意義とは，あくまで，我々がそれを理解したというときに表現する理解の仕方である。意味理解を実効的な構成的手続きを援用しない形で意義と真理との結び付きを確定するフレーゲに対し，ダメットは，表現の意義を，実際に運用可能な検証手段を通じた一連の理解の過程を説明するものとして捉え直す。意義の理論（the theory of sense）は，我々が習熟するところの実践的能力の所有と表出を，命題的知識として体系的に表現することを目指す。一方で指示の理論（the theory of reference）は，それと意味論的値（semantic value）―真理値「真」や「偽」という文にあてがわれる指示を抽象化した概念―との結び付きが，いかにして成立するかを説明する[49]。こうして意味理論は，意義の理論と指示の理論が結合してその中核部分をなし，さらに補助的要素として力の理論が補填されるという仕方で，定式化されるのである。

ダメットは，意義と指示の概念を，『論考』における語ることと示すこととの区別との関連において精査することが理解の助けになると説く[50]。「命題はその意義（Sinn）を示す。命題は，それが真ならば，事実がどのようであるか（wie es sich verhält）を示す。そうして事実がかくかくであるということを語る。」[51]という『論考』のテーゼは，フレーゲ的な意味での指示―『論考』では「事実」（Tatsache）に相当するだろうが―が語られ，そして意義は単に示されるものであることを述べる。これを素朴に推測すれば，意義は多様な認識の仕方に応じて，異なった様態で与えられるがゆえに，その明示的な特定化は不可能であって使用の中で示されるのみなのだ，ということになる。このことをまともに受け取れば，例えば以下のように言える。すなわち，ある二つの三角形が合同であることは，対応する三辺がそれぞれ等しいこと，対応する二辺とその間の角がそれぞれ等しいこと，あるいは，一辺とその両端の角がそれぞれ等しいこと，を論拠として証明可能だが，このとき，三つの合同条件はそれぞれ異なる意義を表現しながらも，いずれも，二つの三角形が合同であるという同一の事実を語る。しかし，どの合同条件を言表するかという選択自体は判明には語られえず，それはまさに直示的に示されるのみである。それゆえ，ウィトゲンシュタイン的な特徴付けにおいて，意義には本質的に「語りえぬ特質」[52]（an ineffable character）が帰属される。

合同条件の言明が，合同であるという事実を記述するという見方は，実際に『論考』において採られた写像理論のように，ごく素朴な言語と事実の対応説を想起させる。それに対し，「文は単に一つのことしか述べない」[53]がゆえに，事実と同一視するような写像理論は維持しえないとするダメットの反論は，以下の含みを持つ。すなわち，「対応する二辺とその間の角が等しい」という文は，「（例えば△ABCと△DEFにおいて）ABとDEの長さが，かくかくの理由で等しい」ということや，「∠CABと∠FDEの大きさがかくかくの理由で等しい」といった諸々の帰属的論拠を表現しない。事実としての像が，一連の複数の文によって示されるところのものを，ある種のモデルとして，一挙に描写する一方で，単一の文が表現することは，あくまでも，対応する二辺とその間の角が等しいこと，のみなのである。しかしながら，文が表現する意味領域の

狭さという指摘は，像と比較した際の言語の非力さを強調するわけではない。言語の成立要件としての体系的ネットワークという根本的思想を思い起こすならば，むしろ逆に，言語使用の本質は，像や図式の単なる表面的な提示と同等の機能を持つようなものではなく，より立体的に錯綜した論理構造の中における，体系的推論という実践に根差した，関連する諸言明の論理的関係性の適正な把握，理解，取扱い，そして適用という側面に存する，ということになる。「特定の言明形式を論理的に真なるものとする決定は，その形式の言明だけに影響するのではない。あらゆる種類の他の諸言明がその感染を受ける」[54]との断言は，言語的実践が首尾一貫性のある構造的機能として振舞うための，文どうしの全体的な調和を要請する。その調和が満たされた実践において，「語の意義を把握することは，それを含んでいる文の真理条件を決定する，ある特定の能力を熟練することである」[55]とするとき，ダメットによれば，意義を「語りえぬ特質」に帰属する必然性はなくなる。実際にダメットは明確に，意義が示されるだけでなく，真理の主張において語られるものでもあると表明する。この論旨の意図を推測すれば，おそらく，意義が暗黙的知識の領域内において直示的に示されるときには確かに語られえないけれども，他方で，それは漸次的に明示的知識として言語的に構造化され，必要に応じて推論に適用され，そして新たな段階の内容を学習する際に理解されていなければならない一要素として知識体系に組み込まれるという複層的な段階が存在する，ということの示唆ではないだろうか。しかしながら，それならば，我々の理解の変容において，いかにして意義が示されるものから語られるものへと展開してゆくのか，という疑問が残される。

この問いは，学習概念の実質化において，絶対に避けては通れない重要な道である。ダメット自身，それに対して明確な回答を打ち出してはいない。だが，一つの鍵は提案しているように思える。それは，「保存的拡張」という概念であり，それは概ね以下のようなことを意味する。すなわち，ある形式的な演繹体系の断片―たとえば，初等数論やユークリッド幾何学におけるある体系の断片を想起されたい―が与えられたとする。その言語断片に対して，新たな語や推論規則を付加することによって体系が拡張し，今までに表現できなかった命題が表現可能となり，またあらたな推論手法によって定理が導出可能になるが，このとき，拡張以前に存在した語の意味や定理，あるいは導出規則などにまったく影響を与えないような形で，すなわち以前の形式的体系自身の閉じた完結性はそのまま維持することによってその体系が拡張されることを，保存的拡張という。ダメットはこの概念に，認識的前進という意味合いを含ませる。まず，ある言語断片における実践について注意が払われなければならないのは，言語使用の多様な相である。その一方の側面には，観察言明に対する同意，不同意といった傾性（disposition）があり，他方には，それらの観察言明を高度に理論的な非観察的言明による推論によって演繹を遂行するという側面が存在する。観察言明たる論拠から適切な推論規則に従って結論が導出される一連の過程が，文の真理値を保存しながら進行するというような，首尾一貫した体系性に言語実践が根差すのならば，異なる使用の相の間に，先述した調和が満たされていなければならない。その中で，すでに知っている文の意義は，我々が言明できたり，示されたときに判明に理解できたり，あるいは問題解決上の振る舞いとして表出できたりするところの構成要素である。未知の新たな規則が導入されるとき―例えば無理数という概念を習得したばかりの子どもが，$\sqrt{a}\times\sqrt{b}=\sqrt{a\times b}$ という新たな規則を学習するとき―，それは当初は直示的に把握されるだろうが，既知の語られる意義の明晰な先行理解[56]を参照し，さらに適切な訓練が経験的に伴うことによって，それ自身も後に，語られる意義となる。とすれば，言語が断片的な観察言明からの保存的拡張を伴うという要件は，より広域的な観点から見れば，推論可能な範囲の拡張とともに，準拠可能な知識体系の拡充と実質化という意味合いも包含することになる。

だが，保存的拡張という概念に訴えるだけでは，先の疑問に十分に答えたことにはならない。なぜならば，示される意義から語られる意義への変容が，いかなる具体的な教育実践と学習内容によって実現されるのか，という点が謎のままだからである[57]。この問いは多分に主題依存的であり，各々の主題―例えば中三数学における無理数の導入，中二英語における不定詞の導入など―に応じて微視的に解明されなければならない。そしてこの問いこそが，実践的であれ理論的であれ，教科教育学の研究に課せられる最も重要な課題なのである。教育学的観点から見れば，ダメットの意味理論の致命的弱点は，学習における理解が，本質的に誤りや迂回を伴いながら，無数の錯綜した経験的蓄積を経由したうえで実現されるという点，および，何を語られる意義として理解しているかは学習者個人の

習熟度合いによって極めて多様であるという点を，全面的に見逃していることである。理解の進展が保存的拡張の形式を取るという主張は魅力的に思えても，現実的な理解は決して直線的な進展を遂げない。したがって，ダメットの意味理論が教育学において生命力を持つためには，単なる転用ではなく，学習の本質的実態との整合的結び付きを考慮に入れた修正を施したうえで，実際の学習指導場面に順応する形での理論的適用が不可欠だろう。だが少なくとも，教科教育が本質的に，子どもの理解の正誤を判断し，誤りがあれば正しい理解へと導く指導実践を目的に据える限りにおいて，ダメットが述べるような客観的な正しさの規準が，暗黙裡にであれ想定されていることは明白である。フレーゲ的実在論はいまや支持し得ないが，ウィトゲンシュタイン的な体系的説明の放棄がその唯一の対案ではない。新たな学習の言語ゲームへの参入を，「すでに存在しているのではないが，言うなればわれわれが採り入れると存在してくる」[58]という意味で外的拘束力を持つ客観的世界への加入と見なすことは妥当である。丸山（1992）の指摘のように「原初的な言語ゲームから通常の言語ゲームへの展開」[59]が教育において問題になるのならば，より一層，ダメットの意味理論の教育学における重要性が顕わになる。そして，

> 実際に，ウィトゲンシュタインの見解は，悪しき時代遅れな学校数学の教育方法に似ている。すなわち，なぜ計算の手法がちゃんと機能するのかということの説明なしに，それらを訓練して教え込ませる（to drill the pupils in techniques of computation without explaining to them why they worked）という仕方である。[60]

というダメットの教育的見解は，言語による説明が単に事後的なもの以上の役割があることを認める。すなわち，言語による規則の明示的理解は，思考の明晰化，知識の体系化，学習内容の反省的な再組織化，そして将来的な事例や予測への適用可能性の判断といった一連の合理的活動に，極めて直接的な影響力を持つ。言語の合理的な理解と遂行という側面を顧慮することなしに，行為の盲目的一致にのみ正誤の基準を求めるような教育は，しばしば納得のいかない教え込みにしかならないのである。

4．思想の哲学 ―教科教育学の哲学的基礎―

議論すべき課題は山積している。哲学的には，第一に，本稿では簡略化された意義の理論と指示の理論のより形式的な議論が必要とされる。第二に，保存的拡張という着想自体の妥当性を検証するには，全体論的言語観に対抗してダメットが提起する分子論的言語観（molecular view of language）がどれだけ説得力を持つかを論じなければならない。第三に，保存的拡張が仮に正しい理解のモデルを提供するとして，形式的な次元で推論規則の拡張がいかになされるかを，直観主義論理の参照とともに解明される必要がある。教育学的には，第四に，意味理論と教育学の実践的研究との調和的融合が目指される。前節の最後でも確認したように，保存的拡張の形式が具体的な教育実践の様式と絡み合うためには，現実に生起する学習状況の記述に適合するように，意味理論の概念的修正を施す必要がある。そして第五に，教育学においても，意味理解の問題を重要なテーマの一つと捉える限りにおいて，実在論と反実在論の論争が同様に「もっとも根本的で手ごわい問題の一つ」[61]として認識されなければならない。素朴な対応説は維持しえないだろうが，しかしアプリオリに実在論の否定にコミットするわけにもいかない。実在論的真理観に我々が傾斜しうるほどの説得的な魅力―たとえば物理的観察における客体的対象としての事物という言説―があるのならば[62]，安易な実在論批判やアプリオリな反実在論擁護に陥ることなく，双方の立場を平等に精査し検討する議論が，教育学の基礎研究においても求められるのである。

実際にダメットが反実在論者と評されるのは，フレーゲ的実在論を批判する際に，意味の習得を実践的能力の所有に還元するという立場に与したためであったにもかかわらず，他方で，合理的な言語使用の成立要件として，客観的規範性の存在がダメットの視野に入っていることは否定しえない。後期ダメットはもっと踏み込んで，言語習得が実践的能力の所有以上のものだという明確な信念表明をする[63]。こうした洞察の一貫性をどう汲み取るべきか，正直今は明確が答えを見出せない。強いて言えば，実在論と反実在論がそう単純に切り分けられるほど安易なものではないということの反映と，意味理解が，実践的能力の蓄積によって記述される営みであったとしても，いわゆる自然主義的な認知プロセスという仕組みに還元できるものではないということの警鐘だ，と読み取ることは可能かもしれない。いずれにせよ，ダメットが，思想を「多数の人の共有財産となりうる客観的内容」[64]と捉えるフレーゲの洞察に，ある種の魅力を感じていることは間違いないのではないか。そのフレーゲの言説を俯瞰し

たうえで，ダメットは，思想が表現される文の言語的分析を通じて，思想の構成要素である概念や，文の意義を把握することがどういうことかを体系化に解明する論理学としての「思想の哲学」を目指す。本研究が最終的に目指す地点は，その「思想の哲学」を教育学―とくに教科教育学―の哲学的基盤として構築することである。そのためには，ウィトゲンシュタインのみならずフレーゲ―ダメット路線を巻き込んだ教育学研究が，ぜひとも必須なのである。

（指導教員　金森　修教授）

参考文献

飯田隆（1987）.『言語哲学大全Ⅰ―論理と言語』，勁草書房

飯田隆（1989）.『言語哲学大全Ⅱ―意味と様相（上）』，勁草書房

金子洋之（2006）.『ダメットにたどりつくまで―反実在論とは何か』，勁草書房

丹治信春（1996）.『言語と認識のダイナミズム―ウィトゲンシュタインからクワインへ』，勁草書房

永井均（1991）.「教えることのパラドックス―「学校文化と生徒人格」序説―」，『＜魂＞に対する態度』，勁草書房，98-106頁

丸山恭司（1992）.「ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論とその教育学的意義―教育論としての言語ゲーム論における『理解』と『知識』―」，『教育哲学研究　第65号』，41-54頁

丸山恭司（2000）.「教育において＜他者＞とは何か―ヘーゲルとウィトゲンシュタインの対比から」，『教育学研究　第67巻　第１号』，111-19頁

米村まろか（1996）.「＜教育内容＞の同一性と共同性―ウィトゲンシュタインのパラドックスをとおして」，『名古屋大学教育学部研究紀要（教育学科）　第43巻　第１号』，79-94頁

Angelelli, I. (Hers.)（1990）. *Gottlob Frege: Kleine Schriften, Zweite Auflage*. Hildesheim: Georg Olm Verlag

Ayer, A. J.（1985）. *Wittgenstein*. London: Weidenfeld and Nicolson

Blasche, S., Köhler, W. R., Kuhlmann, W. und Rohs, P. (Hers.)（1992）. *Realismus und Antirealismus: Herausgegeben vom Forum für Philosophie Bad Honburg*. Schrkamp Verlag

Dummett, M.（1959a）. "Truth", in Dummett, M.（1978c）, pp. 1-24

Dummett, M.（1959b）. "Wittgenstein's Philosophy of Mathematics", in Dummett, M.（1978c）, pp. 166-85

Dummett, M.（1967）. "Frege's Philosophy", in Dummett, M.（1978c）, pp. 166-85

Dummett, M.（1973a）. *Frege: Philosophy of Language*. Harvard University Press

Dummett, M.（1973b）. "The Philosophical Basis of Intuitionistic Logic", in Dummett, M.（1978c）, pp. 215-47

Dummett, M.（1973c）. "The Justification of Deduction", in Dummett, M.（1978c）, pp. 290-318

Dummett, M.（1975）. "What is a Theory of Meaning? (I)", in Dummett, M.（1993b）, pp. 1-33

Dummett, M.（1976）. "What is a Theory of Meaning? (II)", in Dummett, M.（1993b）, pp. 34-93

Dummett, M.（1978a）. "Realism", in Dummett, M.（1978c）, pp. 145-65

Dummett, M.（1978b）. "Platonism", in Dummett, M.（1978c）, pp. 202-14

Dummett, M.（1978c）. *Truth and Other Enigmas*. Harvard University Press

Dummett, M.（1979）. "What do I know when I know a Language", in Dummett, M.（1993b）, pp. 94-105

Dummett, M.（1981）. "Frege and Wittgenstein", in Dummett, M.（1991a）, pp. 237-48

Dummett, M.（1991a）. *Frege and Other Philosophers*. Oxford: Clarendon Press

Dummett, M.（1991b）. *Frege: Philosophy of Mathematics*. London: Duckworth

Dummett, M.（1991c）. *Logical Basis of Metaphysics*. Harvard University Press

Dummett, M.（1993a）. *Origins of Analytical Philosophy*. Harvard University Press

Dummett, M.（1993b）. *The Seas of Language*. Oxford: Clarendon Press

Dummett, M.（1993c）. "Wittgenstein on Necessity: Some Reflections", in Dummett, M.（1993b）, pp. 446-61

Frege, G.（1884）, Thiel, C. (Hers.)（1986）*Die Grundlagen der Arithmetik: eine Logisch Mathematische Untersuchung über die Begriff der Zahl*. Hamburg: Felix Meiner Verlag

Frege, G.（1892）. "Über Sinn und Bedeutung", in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, SS. 143-62

Frege, G.（1897）. "Logik", in Hermes, H., Kambartel, F. & Kaulbach, F. (Hers.)（1983）, SS. 137-63

Frege, G.（1918）. "Logische Untersuchungen Erster Teil: Der Gedanke", in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, SS. 342-61

Frege, G.（1918）. " Logische Untersuchungen Zweiter Teil: Der Verneinung", in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, SS. 362-77

Frege, G.（1923）. "Logische Untersuchungen. Dritter Teil: Gedankengefüge", in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, SS. 378-94

Frege, G.（1923）. "Logische Allgemeinheit", in in Hermes, H., Kambartel, F. & Kaulbach, F. (Hers.)（1983）, SS. 278-81

Green, K.（2001）. *Dummett: Philosophy of Language*. Cambridge: Polity Press

Hermes, H., Kambartel, F. & Kaulbach, F. (Hers.)（1983）. *Gottlob Frege: Nachgelassine Schriften, Zweite Erweiterte Auflage*. Hamburg: Felix Meiner Verlag

Kripke, S. A.（1982）. *Wittgenstein on Rules and Private Language: An Elementary Exposition*. Harvard University Press

McGinn, C.（1984）. *Wittgenstein on Meaning: An Interpretation and Evaluation: Aristotelian Society Series Vol.1*. Oxford: Basil Blackwell

Quine, W. V. O.（1953）. "Two Dogmas of Empiricism" in Quine, W. V. O.（1967）. *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays. Second Edition Revised*. New York: Harper & Row Publishers, pp. 20-46

Quine, W. V. O.（1960）. *Word and Object*. Cambridge, Massachusetts:

The MIT Press
Röska-Hardy, L.（1992）. “Realismus und das bedeutungstheoretische Argument von Michael Dummett”, in Blasche, S., Köhler, W. R., Kuhlmann, W. und Rohs, P. (Hers.)（1992）, SS. 149–95
Schlute, J.（1992）. “Wittgenstein als Großvater des Antirealismus”, in Blasche, S., Köhler, W. R., Kuhlmann, W. und Rohs, P. (Hers.)（1992）, SS. 284–99
Waismann, F. / aus dem Nachlaß. McGuiness, B. F. (Hers.)（1967）. *Wittgenstein und der Wiener Kreis*. Oxford: Basil Blackwell
Wittgenstein, L.（1921/1933）. *Tractatus Logico-Philosophicus with an Introduction by Bertland Russell, F. R. S.: International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
Wittgenstein, L.（1953）. *Philosophische Untersuchungen*. translated by Anscombe, G. E. M., Hacker, P. M. S. & Schlute, J.（2009）. *Philosophical Investigation: Fourth Edition Revised by Hacker, P. M. S. & Schlute, J.* . Wiley-Blackwell Publishing
Wittgenstein, L. / Wright, G. H. V., Rhees, R. & Anscombe, G. E. (Hers.)（1956）. *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*. translated by Anscombe, G. E. *Remarks on the Foundations of Mathematics*. Oxford: Basil Blackwell
Wittgenstein, L.（1958）. *The Blue and Brown Books*. Oxford: Basil Blackwell
Wittgenstein, L. / Rhees, R. (Hers.)（1969a）. *Philosophische Grammatik: Teil 1 . Satz. Sinn des Satzes und Teil 2. Über die Logik und Mathematik*. Oxford: Basil Blackwell
Wittgenstein, L. / Anscombe, G. E. M., & Wright, G. H. V. (Hers.)（1969b）. *Über die Gewissheit*. translated by Anscombe, G. E. M. & Paul. D. *On Certainty*. Oxford: Basil Blackwell
Wright, C.（1986/93）. *Realism, Meaning, and Truth: Second Edition*. Oxford: Blackwell

注

1　ダメットについては，例えば「われわれが論理的演算子を学ぶのは，それらを含んだ言明を使う訓練を受けること，によってである。」（Dummett, M.（1959a）in Dummett, M.（1978c）, p. 17傍点は原著斜字体）などに訓練の重視が見られる。

2　ダメットが使用する「意味の理論」（the theory of meaning）と「意味理論」（a theory of meaning；a meaning theory）の術語の違いについて補足しておく。金子（2006）も指摘するように，「意味の理論」とは，外的世界の言明に対して我々がどのような意味論を採用すべきかを考察する包括的な議論の場を指す一方で，「意味理論」は，ある特定の言語における言明が意味を持つとするとき，その意味の説明に成功するような，その言語の全体についての論理的に構成された理論のことを意味する。本稿では，それぞれ「意味の理論」と「意味理論」の和訳は金子に従う。

3　Dummett, M.（1959b）in Dummett, M.（1978c）, p. 170

4　実在論について簡単に定義すれば，ある言明が指示する対象となるもの，あるいはその真理が，我々の認識作用から独立にすでに確定していると想定する立場である。反実在論とは，そうではないとする立場であり，伝統的な懐疑論や観念論が含まれる。

5　ウィトゲンシュタイン哲学の時代区分は，通例に倣い，『論考』の執筆時を前期，哲学に復帰して論理実証主義者らと交流を持っていた1929年から30年代半ばにかけてを中期，その後『探求』の執筆に取り組んだ時期を後期とする。

6　Wittgenstein, L.（1953），§241

7　たとえば以下のような文言に現れている。「フレーゲを大プラトニストと呼ぶ私の描写は，おそらく文句なしに通用してきたし，また通用すべきことは確実であるが，それでもその含意は，通常理解されているより遥かに構成主義的である。」（Dummett, M.（1978b）in Dummett, M.（1978c）, p. 213）

8　“Sinn”と“Bedeutung”の訳は論者によって多岐に渡る。Frege, G.（1892）の翻訳「意義と意味について」（土屋俊訳，黒田亘，野本和幸編（1999）『フレーゲ著作集４哲学論集』，71–102頁所収）は，“Sinn”に「意義」，“Bedeutung”に「意味」をあてるが，Dummett, M.（1978c）の翻訳『真理という謎』（藤田晋吾訳（1986））は“Sinn”に「意味」，“Bedeutung”に「指示」をあてる。飯田（1987）は“Sinn”を「意味」，“Bedeutung”を「イミ」と記すが，金子（2006）に見られる“Sinn”を「意義」，“Bedeutung”に「指示」とする翻訳がいちばん穏当であろうと考え，本稿はそれに従っている。

9　本稿の最後にも登場するが，フレーゲは思想に「多数の人の共有財産となりうる客観的内容」（objektiven Inhalt, der fähig ist, gemeisames Eigentum von vielen zu sein）（Frege, G.（1892）in Angelelli, I. (Hers.)（1990），S. 148 ）と独自の解釈をあてがう。

10　保存的拡張の哲学的議論については，Dummett, M.（1973b）in Dummett, M.（1978c），p. 220–24 及 び Dummett, M.（1973c）in Dummett, M.（1978c），p. 315–16参照。

11　Dummett, M.（1993a），p. 129

12　Wittgenstein, L.（1969a），Teil 1，§33

13　*Ebd*, Teil 1，§23

14　Frege, G.（1884），Thiel, C. (Hers.)（1986），S. 10

15　なお，本格的に論じようとすれば，『算術の基礎』における第三の原理，すなわち概念と対象との区別という視点に目を配る必要がある。意義と指示との区別という着想もその原理と不可分である。

16　Frege, G.（1897）in Hermes, H., Kambartel, F. & Kaulbach, F. (Hers.)（1983），S. 144–45

17　Wittgenstein, L.（1958），p. 4

18　Waismann, F.（1967），S. 47–48

19　例えば，「ＰならばＱであり，なおかつＰであるならば，Ｑである」という前件肯定規則（modus ponens）の必然性の証明において，「「ＰならばＱであり，なおかつＰであるならば，Ｑである」であり，なおかつ「ＰならばＱであり，なおかつＰ」であるならば，Ｑである」と論証手法を取るような矛盾である。

20　Wittgenstein, L.（1956），Teil 5，§23

21　*Ebd*, Teil 1，§167

22　特に，Wittgenstein, L.（1956），Teil 2，§41及びTeil 5，§41参照。

23　この反論は，Dummett, M.（1973c）．を参照した。

24　Quine, W. V. O.（1953），p. 43

25　Wittgenstein, L.（1969b），§140

26 *Ebd*, §410
27 Quine, W. V. O.（1953）, p. 44
28 Wittgenstein, L.（1969b）, §140
29 Wittgenstein, L.（1969a）, Teil 2, §14
30 *Ebd*, Teil 1, §41
31 Wittgenstein, L.（1953）, §199
32 *Ebd*, §206
33 Dummett, M.（1993c）in Dummett, M.（1993b）, pp. 449
34 Wittgenstein, L.（1953）, §217, 219
35 特に永井（1991）, 102-05頁, 丸山（2000）, 116頁を参照。
36 特にQuine, W. V. O.（1960）, §16を参照。
37 Kripke, S. A.（1982）, p. 74
38 米村（1996）, 89-90頁
39 Dummett, M.（1959b）in Dummett, M.（1978c）, p. 177
40 「表出論証」と「習得論証」という用語自体はダメット由来のものではなく, ダメット哲学を特徴付けるものとしてWright, C.（1986）によって論じられたものである。
41 Dummett, M.（1973b）in Dummett, M.（1978c）, p. 216
42 Röska-Hardy, L.（1992）, S. 187
43 暗黙的知識への言及としては, Dummett, M.（1973b）in Dummett, M.（1978c）, p. 217, Dummett, M.（1976）in Dummett, M.（1993b）, p. 33, Dummett, M.（1979）in Dummett, M.（1993b）, p. 96などを参照。
44 Dummett, M.（1959a）in Dummett, M.（1978c）, p. 17-18
45 Dummett, M.（1976）in Dummett, M.（1993b）, p. 44
46 Frege, G.（1897）in Hermes, H., Kambartel, F. & Kaulbach, F. (Hers.)（1983）, S. 150 なお, Frege, G.（1918）in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, S. 346においても, 思想の把握, 思想の真理値の承認, 判断の表明としての主張の三つの要素の区別が言及されている。
47 米村（1996）, 91頁
48 Frege, G.（1918）in Angelelli, I. (Hers.)（1990）, S. 143-44
49 意義の理論と指示の理論のより形式的な議論については, 例えばDummett（1991c）の第5章. “Ingredients of Meaning”（pp. 107-40）が詳しい。
50 例えばDummett, M.（1973a）, p. 227 及びDummett, M.（1981）, p. 238
51 Wittgenstein, L.（1921/1933）, §4.022
52 Dummett, M.（1973a）, p. 227
53 Dummett, M.（1981）, p. 243
54 Dummett, M.（1959b）in Dummett, M.（1978c）, p. 177
55 Dummett, M.（1973a）, p. 227
56 例えば,「$(\sqrt{a}\times\sqrt{b})^2=(\sqrt{a}\times\sqrt{b})\times(\sqrt{a}\times\sqrt{b})=\sqrt{a}\times\sqrt{a}\times\sqrt{b}\times\sqrt{b}=a\times b$より$\sqrt{a}\times\sqrt{b}$が$a\times b$の正の平方根だから$\sqrt{a}\times\sqrt{b}=\sqrt{a\times b}$」と論証するとき, すでに既習している事柄（たとえば$\sqrt{a}\times\sqrt{a}=a$など）を「語られる意義」を論拠として用いている。
57 それだけでなく, 言語をまったく習得していない人が最初に言語によって概念を把握するということがどういうことか, という疑問も残されたままである。ダメットはこのことについても明言していないが, 断片的な主張を踏まえるなら, 行為による模倣が根源的であることを認めるようである。例えば, Dummett, M.（1979）in Dummett, M.（1993b）
58 Dummett, M.（1978c）, p. 18
59 丸山（1992）, 47頁
60 Dummett, M.（1991b）, p. 294
61 Dummett, M.（1973c）in Dummett, M.（1978c）, p. 318
62 Dummett, M.（1959a）in Dummett, M.（1978c）, p. 30
63 Dummett, M.（1993a）, p. 163
64 脚注6参照。